

# マイウェイ

No.81  
2011

## 大山詣で物語

監修・文中平龍一郎  
写真 櫻井ただひさ

国土交通

財団法人はまぎん産業文化振興財団

平成23年12月発行 ● 発行人 小川 晃 ● 編集人 富安良和 ● 発行 財団法人はまぎん産業文化振興財団 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1 ☎045-252-1711 (直通) 朝西北社 大日本印刷



# 大山詣で物語

監修文 中平龍一郎 大山みちの会・日本国際地図学会会員

江戸庶民のあいだで「大山詣で」が盛んになるのは、江戸時代中期以降です。江戸時代後期になると霊山登拝と物見遊山を兼ねた旅が流行するようになり、関東を中心に、八丈島からも参詣者が訪れました。

表紙／大山阿夫利神社二の鳥居から大山を望む。

裏表紙／伊勢原市下落合の道標

## 大山詣での歴史と大山街道

### 大山寺と阿夫利神社

相州大山は別名阿夫利(雨降)山と

も呼ばれ、古来雨乞いの神のおわす山として、また神仏習合の霊山として人びとから篤い崇敬を集めてきました。

大山寺は、天平勝宝七年(七五五)、東大寺の初代別当(寺務を統括する僧

侶)であった良弁が聖武天皇の勅命で創建しています。当初、大山は山岳信仰の場として開かれました。

その後、建久三年(一一九二)に、鎌倉幕府を開いた源頼朝が参拝し太刀を納めました。これが「納太刀」の起源といわれています。中世以降には修験道が盛んになり、足利氏・北条氏・

徳川氏などの武家の信仰を受けるようになりました。

一方、阿夫利神社は延喜式内社で、大和朝廷と縁が深く、格式の高い神社です。社伝では今から二千二百余年以前の崇神天皇の時代に創建されたと伝えられています。この時代は、弥生時代に当たります。

### 大山講と御師の活動

天正十八年(一五九〇)、豊臣秀吉が小田原城を攻め北条氏は滅亡します。その結果、豊臣軍に参加した徳川家康は小田原城に入城し、北条氏の旧領を回収することになります。家康は、大山が北条氏の勢力下にあったことから、大山が反乱を起こすことを恐れました。そこで大山の僧兵を解散させようと、山麓に降ろし、御師という立場で大山の信仰を広めることに専念させました。その後、不動明王に対する熱心な信者であった春日野局の仲介で、大山と徳川家は和解し、三代將軍家光が大山の保護に努めるようになりました。



上／伊勢原から大山を望む。昔からその偉容が信仰の対象となってきた。下右／安藤広重「東海道五十三次細見図会 程ヶ谷」大山詣での人びとの様子が描かれている。国立国会図書館蔵。下左／大山詣でに使用された御神酒椀。奉納するための酒やいただいた神水などを入れて担いだ。横浜市歴史博物館蔵。





主な大山道。大山道は全部で30ほどあったが、代表的なのは赤いラインで示した矢倉沢往還に沿った道。

— 大山街道 — 田村通り大山道  
— その他の大山道 —



上ノ「大山寺縁起絵巻」平塚市博物館蔵。中ノ「子湯辺りを下る山帰りの二行」古絵はがき。協力・伊勢原市教育委員会。下右ノ「往田宿のまなぎ看板」旅館柏屋に保存されていたもの。宿泊先の入口に掲げて講の表示をした。横浜市歴史博物館蔵（青木正一氏寄託）。下左ノ大山の麓に残る御師の宿坊。



期間に二十万人が参拝したといわれます。この期間には、多くの参詣人が、通過する村々で、宿泊・食事・履物などに多くの金を費やしたと考えられます。江戸時代後期の文化文政期になると、江戸の庶民を中心に旅行ブームが起きます。旅の通行手形は許可を受けるとに手間取りますが、信仰を絡めると容易に取れたため、参詣を兼ねた旅が流行します。大山詣での往路・帰路などで観光地に立ち寄り名物料理を食べるなど、観光を楽しむ形に変わってきました。もつとも多いパターンは、往路は矢倉沢往還の大山街道や、戸塚から大山へ向かう柏尾通り大山道を使って大山詣でを行い、帰路は田村通り大

御師は、江戸をはじめ各地に出向いて布教に務め、大山参詣を行うための講を組織しました。これが大山講です。当初、講の参加者が集団で参詣していましたが、やがて講を代表する代参者が選ばれ、大山詣でを行うようになりました。大山には、雨乞・豊作・豊漁・商売繁盛・航海安全・村内安全・家内安全などを願ひ、多くの人が訪れるようになりました。大山講の参詣者は、白装束で身を清め、手甲・脚絆をつけて菅笠をかぶり、杖を持ち、御師である先導師のもとに「さんげさんげ 六根清浄」と唱えながら歩き、大山が見える場所まで遙拝しました。

参詣を兼ねた旅の流行  
大山道とは、大山詣での人びとが相州大山に向かうために使った道のことです。全体で三十ほどの大山道がありますが、代表的なのは矢倉沢往還の大山街道でした。矢倉沢往還は徳川家康によって整備され、東海道の脇往還として機能しました。現在、大山道を大山街道と呼ぶことが多くなっています。が、本来、大山街道とは大山道を代表する矢倉沢往還の大山街道だけに使われる言葉でした。大山道は江戸時代前期に信仰の道として使われ始め、大山詣では江戸時代中期以降盛んになり、最盛期の宝暦年間には、夏祭り大祭の



上/歌川国芳「相模国大山寺石尊宮朝山図」厚木市郷土資料館蔵。下/「富士山大道中案内記」信州大学附属図書館蔵。明治時代。



山道に入り、藤沢でひと休みして、江の島の弁財天にお参りし、鎌倉・金沢八景を見物するルートでした。

楽しみながら大山詣で行う傾向は、明治時代以降にも引き継がれました。明治二十年（一八八七）、東海道線が国府津駅まで開通し平塚駅が開業すると、多くの参詣者が平塚駅に集まりました。平塚新宿を起点にした矢崎通り大山道の道路改良を行い、平塚駅大山道（愛称ステーション道）を開通させました。平塚駅から数十台の馬車と数百台の人力車を動員し、往路・帰路に多くの参拝者を運びました。それは昭和二年（一九二七）に小田急線が新宿から小田原まで開通し、伊勢原駅が開

業するまで続きました。

### 各地からの大山道

大山詣では、大山講が組織された関東地方を中心に行われましたが、駿河・伊豆地方、松本・佐久地方、新潟県の魚沼地方、福島県の磐城地方などからも、さらには愛知県の三河地方や伊豆諸島からも参詣者がありました。

磐城・水戸方面からの参詣者は陸前浜街道や水戸街道を使い、江戸から矢倉沢往還を通り大山へ、また北関東からは、奥州街道や中山道を使い春日部から府中経由、または熊谷・八王子経由で大山へ向かいました。

松本地方や山梨県からの参詣者は、



葛飾北斎「鎌倉江ノ島大山新板往来双六」大山や江の島詣では江戸の庶民になじみ深く、双六の題材にもなった。神奈川県立歴史博物館蔵。



富士浅間神社を参拝したあと富士登山を行い、足柄峠を経て大山に向かいました。大山の祭神、大山祇大神の息女が富士山の祭神である木花之佐久夜毘売命のため、富士山が大山の一方だけ詣でるのは片詣でといって忌み嫌われ、両山を参拝する習慣が起きました。

また、三河・駿遠地方からは、東海道を小田原から大山へ、伊豆半島からは箱根峠を渡るか、舟で相模湾の湊に上陸しました。伊豆諸島からも舟を使いましたが、八丈島からは黒潮を越えるなどの危険を伴う舟旅でした。

中平龍一郎（なかひらりゅうじろう）●地図研究家。国学院大学文学部史学科卒。ポントに歩く大山街道「キヤパー」大山街道「新・地図と地名」他執筆。



多摩川と二子の渡し碑。東京側から川崎を望む。江戸時代は二子の渡しで多摩川を越えた。



上/②江戸時代中期創業の薬屋灰吹屋（川崎市高津区）。現在は市内各地に店舗を構える。下/③とうとう坂（横浜市都筑区）。右側に茂った藪は当時のままといい。左/④はかり（秤）田中屋（川崎市高津区）1910年代。はかり田中屋蔵。（「ホントに歩く大山街道」より転載）

右/⑤小台坂（川崎市宮前区）を歩く著者。左/⑥旅籠綿屋（横浜市青葉区。明治時代まで営業していた。現在も当時の面影を残す。



二子溝口宿から荏田宿へ  
矢倉沢往還の大山街道は、江戸の赤坂御門を起点とし、青山、三軒茶屋を経て、多摩川を二子の渡しで越え、二子溝口・荏田・長津田・下鶴間・厚木・糟屋などの宿場を通り、終点の大山に至る、七十数キロメートルの道程でした。二子の渡しは、大正十四年（一九二五）に二子橋が架橋されたことで廃止になりますが、

大山道を代表する矢倉沢往還は、全長七十数キロ。途中には、かつての宿場の面影を残す商店や寺社、道標などが残されています。

## 矢倉沢往還を辿る

江戸幕府は江戸防衛上、また多摩川が暴れ川で流路が定まらないことを理由に架橋をしませんでした。

二子溝口宿は、寛文九年（一六六九）に溝口村が宿場に指定されています。宿場内は大山街道、府中（川崎）街道、神奈川道が通過し、また多摩川の舟運の中心地として発展しました。この地は、現在も活性化された商店街の中に宿場の面影が残っています。宿場には江戸時代中



①川崎市宮前区の馬頭観音。道標の役割を担った。

期に創業された薬の灰吹屋をはじめ、タナカヤ呉服店、はかり田中屋などの老舗が店を開いています。文化的な面でも見るべきものが多く、岡本かの子・岡本太郎をはじめ、益子焼の巨匠・濱田庄司などを輩出しています。また島崎藤村・国木田独步などの文人や、和辻哲郎・柳田国男など多くの文化人が訪れました。

多摩丘陵は地形の起伏が激しく、二子溝口を出るとねもじり坂、八幡坂、小台坂などの急坂が連続し、とうとう坂を下って荏田宿へと向かいます。大山街道の盛時には、相模川のアユを夜通し走って江戸まで運ぶ「鮎担ぎ」が、早朝、三叉の庚申堂でお賽銭をあげ、草鞋を履き替え、溝口の旅籠・亀屋に向かいました。



上右/⑨海老名市の大榎。上左/下鶴間宿。“The Village of Tsuruma” The Far East 1871.11.16 横浜美術館蔵。下右/⑩お銀様の墓(綾瀬市)。下左/渡辺華山「游相日記」。下鶴間宿の頁。



⑦馬の背(町田市)。



## コラム

### 渡辺華山

『游相日記』は、天保二年(一八一八)に渡辺華山が田原藤主の妾腹の子・三宅友信の母親を訪ねた時に書かれた日記で、道中の風物を記録した貴重な資料になっています。九月二十日に江戸を出発し、小園村で友信公の母親である「お銀様」と二十年ぶりの再会を果た

鎌倉街道が交差する交通の要衝です。数軒の旅籠を中心に、小間物屋・飯屋・染物屋などで賑わっていました。明治時代初期には、繭や米の市場も開かれました。国分宿に向かう大山街道を左に入ったところにお銀様の墓があります。

国分宿は、大山街道と八王子(藤沢)街道が交差する交通の要衝でした。河原口からは、対岸の厚木に向けての渡しがありました。

### 国分宿から大山へ

荏田宿は、近在農村の物資集散地として栄えた宿です。道路の両側には三軒の旅籠があり、足袋屋・古着屋・提灯屋などの店がありました。しかし、文政四年(一八二二)と明治二十七年(一八九四)の大火で衰退しました。

長津田から下鶴間宿までの大山街道は、途中、「馬の背」を通過します。道路の両側は崖になっており、晴天には大山・丹沢山地が一望できます。下鶴間宿は、大山街道に八王子街道や

### 荏田宿から国分宿へ



上/葛飾北斎「鎌倉江ノ島大山新板往来双六」(谷本 部分。神奈川県立歴史博物館蔵。下/⑧長津田の常夜灯(横浜市緑区)。

大山街道は荏田宿を出たあと長津田宿に向かいますが、途中、谷本川に架かる川間(三文)橋を渡ります。ここは葛飾北斎の浮世絵に描かれ、渡辺華山の『游相日記』にも記されています。長津田は江戸から約九里の地にあり、江戸時代初期に宿場に指定されました。横浜開港後は神奈川道を通して、八王子から横浜港へ絹糸を運ぶ中継地として発展します。しかし、昭和二十九年(一九五四)の大火で宿場の広い範囲を焼失しました。



上右/⑬道標(厚木市)。「右大山」と刻まれている。下右/⑮太田道灌の胴塚。道灌が開基となった上粕屋の洞昌院にある。下左/⑩下糟屋の町並み。古い時代の面影を残す塀がある。



上右/相模川。ここから相模川を越えて厚木宿へと向かった。上左/①厚木の渡し碑(厚木市)。中/大山街道から見た大山。古絵はがき。協力・伊勢原市教育委員会。下右/⑫は厚木神社。下左/⑭は長徳寺(ともに厚木市)。大山詣での途中で人ひとが立ち寄った。



## コラム 大山街道の地形

大山街道は基本的には尾根道を歩きます。たとえば東京の青山通りは、道路に沿って家屋が建ち並びますが、ビルの間を覗いてみると道路の両側が落ち込んでいます。道路が尾根を通過する最大の理由は、水難を避けるためです。

一方、多摩川や相模川の沖積低地は水捌けが悪い湿地が多く、荷

車・牛馬の移動も、人の移動も困難です。そこでは道路は、自然堤防の微高地を辿っています。自然堤防は河川の氾濫で作られた地形で、土砂が数十センチ〜二メートルほど堆積し、小規模の洪水を防ぐことが可能です。二子溝口宿や厚木宿の大山街道がこれに該当します。

流する交通の要衝で、伊勢原宿に劣らない賑わいを見せました。旅籠・問屋・万屋・質屋・薬屋などが建ち栄えていましたが、明治三十四年(一九〇二)の大火で多くの地域を焼失しました。

大山街道は咳止地蔵前の市米橋を渡つ

た所で矢倉沢往還と分離します。千石堰用水沿いの三所石橋供養塔を右折すると、太田道灌が開いた洞昌院と道灌の胴塚があります。大山街道はそのまま直進し、石倉橋で田村道、金目道などの大山道と合流して大山へ向かいます。



厚木宿は下野烏山藩厚木役所を中心に賑わい、小江戸と呼ばれていました。大山街道や八王子(平塚)街道が集まり、また相模川の物資集散地など交通の要衝でした。家々の屋根に板や茅葺を施しました。宿場の中央に堀を流すなど防火に努めていましたが、慶応三年(一八六七)と明治十五年(一八八二)の大火で衰退しました。天保二年(一八三一)、渡辺華山は厚木に入り、旅籠万年屋に二泊しています。書家、斎藤鐘輔など厚木の文化人や名士と交流し「厚木六勝図」を残しました。厚木宿からの大山街道は、相模川沿いの自然堤防を辿り、岡田宿、愛甲宿を経て糟屋宿に向かいます。

糟屋宿は、大山街道に柏尾道などが合



② 伊勢原市沼目の道標。大山道と日向道を示す。



歌川国芳「相州大山道田村渡の景」山口県立萩美術館・浦上記念館蔵。右 (①) は平塚市側に残る田村の渡し碑。



## 田村道 — 江の島からの大山道

江戸庶民の暮らしが安定する江戸時代後期には、旅行ブームが起こり、江の島観光を兼ねた大山詣でが盛んになりました。

田村道（田村通り大山道）は藤沢の四ツ谷から入り、寒川で柳島道と合流したあと、相模川を田村の渡しで越えました。相模平野を横断し伊勢原宿を通り、石倉橋で矢倉沢往還の大山街道に合流して大山に向かっていました。

江戸時代後期の文化文政期になり、江戸庶民の旅行ブームが起こると、大山詣でも参詣を兼ねた旅が多くなります。矢倉沢往還の大山街道や戸塚宿の



夏祭りの時期に立てられた大山献灯。寒川町に残る。協力・伊勢原市教育委員会

不動坂から大山に向かう柏尾道で大山詣でを行ったあと田村道に入り、藤沢宿で疲れをいやして江の島の弁財天を参拝し、鎌倉・金沢八景の観光を行い、舟で房総半島や江戸に帰るルート、あるいは東海道を歩き江戸に向かうルートが作られました。

一方、反対に東海道を歩き四ツ谷から大山に向かう参詣者、あるいは房総半島や江戸から舟を使い、金沢湊や三



上 相模川。この付近に田村の渡しがあった。下右 / 鈍舎文作「大山道中膝栗毛より「藤澤」の項。入口に「大山講中」の看板が見える。下左 / ③ 江島神社辺津宮。



浦半島の湊に上陸し、鎌倉・江の島などの観光をしたあと大山に向かう参詣者もいました。

田村道を利用する参詣者は多く、阿夫利神社下社から本社に向かう登拝門の鍵を管理する日本橋の大山講である「お花講」も、この道を使ったため「お花講大山道」とも呼ばれていました。

田村道が通る相模平野の低湿地帯は相模川や浜田川などが作った小鍋島・大島などの自然堤防の微高地を辿ります。また平塚市北部の横内では平塚の須賀湊からくる糟屋道、下谷では平塚本宿からくる中原豊田道などの大山道と交差し、そのあと、石倉橋で大山街道に合流しました。

# 大山阿夫利神社

鈴川上流部に形成された門前町の参道を抜けケーブルに乗る。急峻な山肌を眺めながら五分ほどで到着。今も昔もたくさんさんの参詣者が訪れる大山阿夫利神社である。



大山阿夫利神社下社。



上は女坂、下は男坂。徒歩ルート。女坂はゆるやかだが、男坂はかなり急坂である。



上/大山寺。天平勝宝7年(755)開山。下右/二重滝。参詣者はここで禊をした。下左/大山入口の三の鳥居。古絵はがき。協力・伊勢原市教育委員会。



三の鳥居をくぐり、新玉橋で鈴(大山)川を渡ると、道路の両側に宿坊や旅館が建ち並んでいます。豆腐坂からこま参道に入ると、石段の両側には土産物屋・食堂・豆腐料理屋などが軒を連ねています。現在、阿夫利神社下社まではケーブルカーを利用できますが、八意兼善神社が建つ追分から女坂か男坂を上るルートもあります。

女坂を通れば途中で、大山寺の参拝

ができます。大山寺は、明治元年(一八六八)に神仏分離令ができるまで、現在、阿夫利神社下社が建つ場所にあります。こちらもぜひ御参拝ください。また、ケーブル駅の手前には良弁滝。下社から、大山の山頂が見渡せる見晴台への途中には二重滝があります。かつてはともに禊の場として、庶民にも修験者にも大切な場所でした。阿夫利神社は延喜式内社で、関東総

鎮護の神として崇敬されてきました。阿夫利神社下社は、拝殿とも呼ばれ、山頂の三神をここで礼拝することになっています。本社に大山祇大神、撰社に大雷神、前社に高禰神を祀っています。下社から本社までは、一丁目から二十八丁目を辿ります。十六丁目の本坂追分では、秦野の義毛から上ってきた六本松道、羽根尾道、小田原道などの大山道と合流します。



山頂に到着した著者。ここには本社がある。



こま参道。両側には大山の名産品の店や豆腐料理店などが続く。

右上/モエ・エ・シャンドン社のドン・ペリニオン修道士の像の前で、派遣団一行と。右下/トレビの泉では、再びローマを訪れることを願って、コインを投げた。下/モエ・エ・シャンドン社のソムリエと。



のがシャンパンとワインです。そんな私がワインの聖地へ行けるなんて、まるで夢のような話です。フランスに着いて二日目に、ランスにあるモエ・エ・シャンドン社の門入って、シャンパンの発明者であるドン・ペリニオン修道士の銅像を見上げたときは、感無量。「派遣団に参加してよかった!」と実感した瞬間でしたね(笑)。

コミュニケーションの大切さ

昔から「よいワインは、よい畑から」といわれています。気の遠くなるような年月をかけて優れた畑を作り上げて、優れたブドウを育て、ブドウのエッセンスを凝縮したような優れたワインを

生み出していく。そこにはさまざまなドラマがあります。そういう歴史の重みを感じながら、一杯のワインをいただく。まさに至福の瞬間です。一口飲んで、思わず「美味しい!」

ここでは七年も寝かしたシャンパンを試飲させていただきましたが、フレッシュな香りとエレガンスな味わいはさすがでした。(値段が)高いのも無理はないなあと。またそれだけに、スタッフの方の熱意・プライドには相当なものが感じられました。

今回さまざまな商業施設を視察して、魅力的な経営者やスタッフとお会いして、いちばん感じたことは、皆さんの仕事に対する誇りとそれを表現するコ

## 海外派遣事業のご紹介

国際的視野の広い中小企業青年従業員の育成を目的として、昭和45年に「神奈川県中小企業技術者等海外派遣事業」を、また、平成1年に「神奈川県商業従業者海外派遣事業」を開始し、継続実施しております。現在まで、中小企業技術者等派遣事業に約830名、商業従業者派遣事業に約170名の方々が派遣団員として参加され、欧州の先進国で貴重な視察研修を体験されています。応募要領等詳しくは、ホームページをご覧ください。

## コミュニケーション力と魅力的な笑顔が 商売繁盛の秘訣です。

横浜市保土ヶ谷区 (株)丸秀園 椿仁美さん

海外派遣団員が語る ⑤

### 憧れのワインの聖地へ:

昨年十一月に、「第十六回神奈川県商業従業者海外派遣団」に参加させていただきました。八日間の日程で、フランスのパリ、ランス、リヨン、ボージョレとイタリアのローマの商業施設を視察しましたが、なによりうれしか

ったのは、シャンパンの「ドン・ペリニオン」で有名なモエ・エ・シャンドン社と、「ボージョレ・ヌーヴォー」で知られるジョルジュ・デュブッフ社を訪ねたことでした。

私は祖父の代から続く茶舗(丸秀園)に勤めています。自他共に認めるワイン好きで、お茶の次に大好きな



茶舗「丸秀園」3代目の椿仁美さん。

上/「ハマのアメ横」と呼ばれる松原商店街の入口近くにある茶舗「丸秀園」。椿さんは、店頭で笑顔の接客。右下/量り売りのコーナーで、母親の小夜子さんと。環境に配慮して、茶筒持参のお客さまには10円のキャッシュバックがある。左下/お勧めの人気商品2種。なお、年末には1日2万人が商店街を訪れるとのこと。



【松原商店街とその周辺】 上2点/商店街のにぎわい。右は、入口のアーチ。右下/橋樹神社。左下/帷子川からの眺め。遠くにランドマークタワーが見える。



コミュニケーション力ですね。

ローマでは、美人姉妹が経営する老舗のバー（居酒屋兼軽食堂）を視察しましたが、「お店の食事が美味しいのは当たり前。お店に来てくれるお客さまの多くは、私たちの笑顔に会いに来るのよ」と誇らしげに言う、その自信満々の笑顔には、びつくりしました。しかし、実際、お客さまは彼女たちの笑顔に会えて、じつに幸せそうに帰っていく。すばらしいと思いましたね。

お客さまにお伝えしたいこと

お店が繁盛するには、繁盛するだけの理由があるんですね。その第一は、優れた商品の力です。しかし、それを

お客さまに伝える力がないと、せっかくの商品が埋もれてしまいます。

ワインもお茶も、長い年月をかけて作り上げた畑から生まれますが、畑には畑の個性がありますし、個性を生かすのが生産者の知恵と努力です。私の仕事は、商品が生まれる背景をお客さまにお伝えし、お客さまとのコミュニケーションをとって信頼感を得ることで、できればお客さまに「風景」を思い描いていただけるように説明したいと思っています。

たとえば、陽光を浴びて生い茂る茶畑の風景を思い描いていただければ、店頭で飲んでいただく一杯のお茶が、何倍にも、何十倍にも味わい深いもの

になるのではないのでしょうか。それも魅力的な笑顔でお伝えできれば最高です。すげだね。

（談）

www.marusyuen.co.jp/



丸秀園松原店 ● 横浜市保土ヶ谷区宮田町1-5  
 4 ☎0453361123 営業10時~19時 毎月第3水曜日定休 最寄駅は 相鉄本線天王町駅  
 椿(美) (つばき・ひとみ) ● 昭和51年生まれ。23歳のときに丸秀園に入社。現在、松原店で銘茶・海苔の販売を担当。

## はまぎん寄席のご案内

毎年恒例となりました「はまぎん寄席」は、古典から新作落語まで意欲的に取り組まれ、舞台やテレビなどで幅広く活躍中の柳家花緑師匠をお迎えします。どうぞ、ヴィアマールで大いに笑って楽しいひと時をお過ごしください。

- 日時 平成24年2月25日(土) 開演14時(開場13時30分)
- 会場 はまぎんホールヴィアマール(横浜銀行本店ビル1階)
- 主催 (財)はまぎん産業文化振興財団
- 協賛 (株)横浜銀行
- 料金 2,800円「全席指定」(消費税込み)

\*未就学児の入場はご遠慮ください。\*チケットが売り切れの場合は、ご容赦ください。

## 前売りチケット取り扱い

はまぎんホールヴィアマール ☎045(225)2173(平日10時~16時)  
 ローンチケット ☎0570(000)777(コード 35976)



柳家花緑師匠

はまぎんホールヴィアマール  
利用のご案内

イタリア語で「船便」を意味するヴィアマールは、広く世界へつらなる文化、芸術をお届けするホールでありたいとの願いをこめ、名づけられました。ジャンルを問わず、コンサート、講演会など様々な催し会場にご利用いただけます。

## 施設概要

- 所在地 横浜銀行本店ビル1階  
(横浜市西区みなとみらい3-1-1)
- 客席数 517席(前舞台使用時490席)
- 使用時間 9時~22時まで
- 使用料金 基本料金、技術者料金、付帯設備使用料の合計。
- 休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、  
年末年始、5月3日~5日
- お問い合わせお申し込み先 ヴィアマールホール事務局  
☎045(225)2173(平日10時~16時)



はまぎんホール ヴィアマール

<http://www.yokohama-viamare.or.jp/>

※マイウェイへのご意見・ご要望は

[info@yokohama-viamare.or.jp](mailto:info@yokohama-viamare.or.jp) へお気軽にお寄せください。

関東百名山の一つに数えられている大山、その雄大な山容は、多くの人々を魅了してやみません。古来より信仰の山として崇敬されていますが、江戸時代後期には、落語の「大山詣り」でお馴染みのように、庶民の楽しみとして物見遊山を兼ねた「大山詣り」が盛んになり、その往来した道が「大山道」の名で各地に残されています。

「マイウェイ」では、かつて多くの江戸庶民が利用した矢倉沢往還の大山街道について、多摩川の二子の渡しを起点に、今に残る「大山詣り」の道程を中心に紹介いたしました。街道の風景は時代を経て一変しておりますが、往時が偲ばれる道標や商家、旅籠跡など

に宿場町の遺香が感じられ、これらの貴重な文化遺産を守り続けていくことの大切さを改めて感じた次第です。

「マイウェイ」を通して、「大山詣り」の歴史を、広く地域の皆さま方にお知らせするとともに、「大山道」を巡る歴史散策に少しでもお役に立つことができ得れば幸いです。

最後になりましたが、執筆・監修をいただきました中平龍二郎氏をはじめ、取材にご協力いただいた皆さま方に、厚く御礼申し上げます。

財団法人はまぎん産業文化振興財団  
事務局参与 清水照雄

◎次号予告(2012年3月下旬刊行)

「かながわ民俗芸能物語」  
〜鎌倉 藤沢編〜 (仮題)